

Title	露国文豪アンドレエフ論
Sub Title	
Author	昇, 曙夢
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.4 (1909. 5) ,p.513(103)- 521(111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090501-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜 錄

露國文豪アンドレエフ論

慶應義塾三田文學會に於て

昇 曙 夢君講演

レオニード・アンドレエフが初めて文壇に現はれたのは、千八百九十八年で、其後二年を経て彼は既に眞面目なる批評家の注意を喚起したのである。其れから四五年も経つとゴリキヤや其他の大家を壓倒して今では露國文壇を獨占して居るやうな勢である。アンドレエフが斯くも迅速に社會的注意を喚起した原因は専ら彼れの天才の特質に因るので、つまり彼れの創作力が他の作家と異つて居る所から來て居る。それで私の話も彼れの創作力の特質から始まるのである。凡そ藝術家の描く可き事柄の範圍は人間と人間との生活、一口で

云へば、人生と云ふ事に定まつて居る。けれども總べての藝術家が人生の内、人間の内に同一の物を探ねて同一の物を發見すると云ふ譯ではない。假令同じ事柄でも其觀察の仕方や描寫の方法と云ふものは藝術家に依て其れぞれ違つて居る。例へば四五年前に亡くなつたチエホフである。彼の興味を引いたものは重に彼れの身邊を取り巻いて居た現實の社會で、彼の作物には此の社會の上に成長し生活して居る人物が描かれて居る。即ち彼の創作の範圍は専ら周圍の實社會であつて、其れ以外には一步も出ない。彼の創作の精神や又其の支配觀念たる厭世主義は或境界に限られて居て、つまり其時代丈の精神であり、又其時代丈の厭世主義である。時代方處の關係を超越して一般人類的の問題を描くと云ふ事は殆どチエホフに於て認められない事である。世に時代の兎と云ふ語があるが、チエホフの如きは其の適例だらうと思ふ。それでチエホフのやうな藝術家となるには、其の當時の生活に深く徹底して、其の社會のあらゆる現象

を細大漏らさず観察すれば其れで充分である。チエホフの藝術的態度は即ち斯くの如きものであつて其代りに如何なる些細な事柄も彼の爛々たる眼光を逸する事は出来なかつた。チエホフの數多き短篇は即ち此の平凡單調なる些細な事相を其の折々に捉へたもので、所謂人生の破片である、要するにチエホフの天才は、人の眼に着かない様な細かい線や點から段々と作り上げられたと云つても善いのである。處がアンドレ、エフの創作力になるとチエホフとは全く違つて居る。アンドレエフは時代の兒ではない。彼の作物も亦或る時代に於ける或る社會を寫したのではない。彼は全く時代方處の關係を超越して一般人類の問題に精神を傾倒して居る。個々の社會的大氣は彼が解決せんとして居る問題や疑問の本質を動かす譯に行かない。彼の興味を懷いて居る點は全く普通の人間の考へ及ばない方面で、吾々の眼に觸れない人生である。然し我々と無關係のものではなく昔から人間の個性を壓迫し個人の自由を支配して居る人生

の根本問題である。是れがアンドレエフの天才の特質であつて又他の作家と違つて居る點である。

我々がアンドレエフの作物に見る所の特質も矢張此の特殊の天才から來て居る。アンドレエフの創作を研究するには先づ是れを二方面より見て行く必要がある。即ち藝術家としての方面と哲學者としての方面で、又吾人が彼の作物を讀んで受くる處の印象も藝術と哲學とを組合せた様な印象である。つまりアンドレエフは寫實主義と形而上的思想とを結合して象徴的若くは神秘的の新らしい文學を開いた天才である。彼れが創作をする場合に於ては其主人公が現實の社會から取られたか、現實の人物であるかどうかと云ふ事は更に問はない。彼はそれよりも、もつと複雑な一般人類的問題を解決して居る。彼は事實を事實として有の儘描いて居ると云ふよりか寧ろ論議して居るのである。例へば二葉亭氏が譯された『血笑記』である是れは原書では『赤き笑ひ』と云て戦争の恐る可

き事を描いたのであるが併し戦争を一の事實として描いて居るのでなく一般の問題として、世界的疑問として是れを論じて居るのである。尤も露西亞の批評家の中には此『血笑記』が日露戦争の事を描いたものだと言つた人もあるが、併しアンドレエフは此の戦争に従軍した事もなければ實際現場に臨んで此の戦争の慘憺たる光景を見た譯でもない。假りに日露戦争が此の『血笑記』を作る一の動機であつたとした所で、是れは決して日露戦争と云ふ事實を其儘に描寫して居るものではない。假令戦争が滿州の野に起らうが、巴爾幹半島に起らうが又何日何時生じやうが其んな事にはアンドレエフは更に注意して居ない。此の事は『血笑記』の最後の斷篇を取つても能く分る。此處に於てアンドレエフは或辯士の口を借りてこんな事を述べて居る。

『、生存上新生面を開くのは諸君の任務であります。諸君は青年である。諸君は未來に生活すべき人である。宜しく此の如き狂暴慘酷なる

事と關係を絶つて、以つて自己の生命を保つべきである。未來の國民の種を保全すべきである我々は今日の慘狀を見るに忍びぬ。之を目撃しては眼中の血走るを禁ぜぬ。實に天が頭上に落懸り大地が足下に裂けるやうな感がある。諸君、假りに我輩は氣が狂つてゐるとするも、我輩の云ふ所は眞理である。我輩には父があり兄弟があるが皆戦争で牛馬の屍の如く腐敗しつゝある。宜しく筆を焚いて穴を掘つて、武器を鑄潰して埋めて了ふが好い。軍人を捕へてその燦たる狂氣服を剝いで、寸裂して了ふが好い、我々は最早忍ぶことが出来ぬ、同類が死につゝあるのである、、『血笑記二二三—二二五頁』

つまりアンドレエフは時代方處と云ふ様な條件や關係に支配されずに世界的若くは一般人類的现象に就て思議して居る。即ち表面の事實を見ずに直ちに其の事實の本體に徹底せんとして居る。又人物の上から言つても、例へば『血笑記』の内に描

かれて居る主人公にした處で『思想』と云ふ象徴的作物の主人公ドクトル・ケルゼンチエフにした所で『ヒーワのワシリー』と云ふ傑作の主人公にした所で、何れも現實の社會から取られた人物とは見えない。併しアンドレエフの描いて居る社會や人物が現實の社會や人物で無くても決して彼が創作の價値を減ずるものではない、何故ならば彼は藝術家なると同時に哲學者である。藝術家としては何處迄も現實に忠實でなければならぬけれども哲學者としては又其れ以上に何等の條件や制約にも絡れないで廣く事相を観察しなければならぬ。と言つて彼は決して現實を無視して居る譯ではない。彼は藝術家としては何處迄も現實に觸れて居て忠實に實社會を描いて居る。何處迄も周圍の人々と共に人生の痛苦を荷はんとする煩悶の人である。例へば彼れが最近の傑作でトルストイ伯の八十回誕辰祭に献じたと云ふ『七死刑物語』などは其好適例であらう。此の作は死刑に宣告された七人の革命黨の經歷と死刑前に於ける彼等の心

理状態を寫したもので全然現代の露西亞の寫實である。何處を見ても今抉り取られた計りの生温い肉片が血に染つた儘ヂリヂリと顫へて居ると云つた調子で讀みながら辣然とする様な節が多い。是れは全く筆で綴られた文字でなく生ける周圍の實社會から揉ぎ取られた生活の破片と云ふものであらう。アンドレエフは即ち此の物語に於て今日露國の社會に漲つて居る恐る可き暗黒を描寫したのである。多くの人々は現に此の暗黒界の内に生存しながら其れを認めずに居る。寧ろ認むる事を欲しないのである。只滔々として流れ去り流れ来る生活の濁流に呑み込まれて再び浮び出づるの望みもなく空しく過度状態の内に迷つて居るのが今日の露西亞である。露西亞人は現に此の暗黒の内に有りながら現實の生を意識せずに居るのを獨り醒めたるアンドレエフは即ち早くも是れを感じて其恐怖を具體的に傳へたのである。アンドレエフの作物が露西亞の社會を動かして居るのは何より確かな事實で讀者は皆自分自身が作中に描かれて

居る罪惡の關係者であると云ふ事を自覺して居る。之に依つて見てもアンドレエフの作物が如何に現實の露西亞に觸れて居るかと云ふ事が分る。同時に彼の作物の社會的價値も認められる。夫れ故に或人々がアンドレエフを目して現實の社會と没交渉の作家であると云ふ批評は只其一面を見て他面を知らない處の皮想な見解に過ぎない。偶々彼が現社會を超越して是から十年や廿年先の社會を描いて現實の社會と何等の關係もない様に見えるのは却てアンドレエフの天才の大なる所以で又是れあるが爲めに彼の作物が新しい意味を以て世界に迎へられて居るのである。

三

アンドレエフを研究するには單に其の創作力の特徴を見た丈では足りない更に此の特質を産み出した彼の人生觀に就て考ふるの必要がある。アンドレエフの人生觀の基礎を要するに神秘的運命と云ふ事に歸着するのである。此の點に於て彼は基督教の世界觀を離れて昔の運命説に立返つて居

る。トルストイ伯は曾て天才の定義を下して眞個の天才とは平凡なる日常生活の中に美と悲劇とを發見し得る人を謂ふのであると言つたことがあるが、アンドレエフは即ち此の人生の根底に横はつて居る悲劇に着目して居るのである。そして彼は此の深淵なる人生の苦を嘗めながら何うかして此の苦界を脱すべき活路を得たいと頻りに追求して居るのだ。不斷彼れの眼に映ずるものは、石の如き生命のない都府と空尊の如き家屋である。其中に人々は籠の中の鳥見たやうに閉鎖されて居る人々の心も利己主義の殻に包まれて居る。死せるが如く冷然たる荒野と自然とは唯だ時々、臆病なる人類社會より響く呪詛の絶叫を反響するのみで、人間の苦痛と何等關する所がない。それで、アンドレエフは如何にも生の苦に堪えざるもの、如く、其聲を聞き其狀を眺めつゝ、是れ以上は最う忍ぶ事が出来ないと云つた調子である。故に彼れの作物は何れも暗黒と恐怖とに満ちて居る。彼れの作物に於て、一切の存在は謎である。人間は

盲目なる被働的の犠牲である。人類は越ゆ可からざる障壁で以て、善の世界から割然分たれて了つて、癩病者の如く助けなき頭惱を徒らに障壁の廻りに打碎いて居る。そして其上を黒い翼の生へた赤き笑ひが飛んで居ると言つた風である。是れは決して色彩を濃化した譯ではなく、生の恐怖其物を形にした丈である。

アンドレエフは人間の造つた幻像が如何に虚偽のものであるかを示さんが爲に、人生の面より凡ての被布を剥取つて居る。現はれ来るものは皆な迷誤である、虚偽である。見よ最初は金箔附の寶物と思つたのが、後になつて見ると、一個の壊れた古器に過ぎない。人生の事概ね然うである。例へば『天使の像』だ。クリスマス・ツリーの天使の像が、最初は少年サーシユカの眼には何より美しく貴きものに見えたが、後には地窖の中に溶けて、流れて、消え失せて了つた。同時に今迄の幻像も消滅した。例へば遠き自由の曠野を空想せる『若き職工』だ。彼が空想の生は現實の生でない。人

生とは畢竟人を怒らし又は喜ばす所の玩具のやうなもので、人は皆な此の玩具に翻弄されて居るのだ。我が心の墓に沿うて過去を眺むれば凡て是れ死の影である。現實の生は永久に醒めざる夢である。人を生きながら葬る墓である。如何にして此の現實の生を存續しやう。如何にして此の現實の苦を遁れやう。アンドレエフは則ち此の苦界を脱すべき活路を絶えず求めて居るのである。

例へば『思想』中のドクトル、ケルゼンチエフだ。彼は高邁なる思想を以て世に打勝たんとして居る。彼より見れば、父祖傳來の幸福の中に、濫かき生を營んで居る世の義人等は一文の價値も無い。彼は冷かなる思想を以て勇ましく人間社會の法律と戦つて居る。然し、彼れでも絶えず冷静峻酷なる思想の鏝の下にはかし、平然安居して居ることは出来なかつた。未だ何か足りないものがある。何か他に要するものがある。アンドレエフは遂に之を宗教に求めて見た。例へば『ヒーワのワシリイ』だ。本篇の主人公たるワシリイは不斷神

と人間に關する眞を求めて居る。彼は信仰が山をも動かさんことを欲して居る。彼はイブセンのブランドの如く、全世界を救はんとして居る。其れが爲には何んな犠牲も惜まず、何んな障害も苦としなかつた。然し彼は遂に死者を復活せしむることが出来なかつたのである。茲に於てカワシリイの幻像は全く壊れて了つて、彼は宗教を呪ひ、神を罵りながら嵐の如く、人なき往來を駈け出したが、途中でバツタリ斃れて其儘死んだのである。則ち信仰の破滅である。

既に思想頼むに足らず、宗教亦頼むに足らずとせば、人生の活路は之を何處に求むべきであらうか。アンドレエフは今や死物狂ひになつて其の活路を求めて居るのである。

アンドレエフは單に色彩を濃化して居るのではない。彼は却て凡てを裸體にして居る。凡て裸體なるものは美なるか、醜なるか、恐ろしきか、何つちか一ツである。偽善の教義、皮想の見解は彼に於て何等の權威も有たない。普通の人生觀は最

早彼を安心せしむるに足らないのである。彼は何にも斯も凡て人類悲劇の同盟者として取扱つて居る。例へば『赤き笑』だ。戦争だ。人々は互に噛合つて居る。臆病なる群集はモンゴールの前にバツタリ斃れて居る。墳墓は間斷なく薔薇色の死體で埋められて居る。人は狂氣になつて居る。狂氣になつて晝夜の區別なく、乾いたペンで綾なき文字を綴つて居る。紙を反しては頻りと偉大なる不滅の文字を書いて居る。一生懸命心の血を絞つて書いて居る。是れはシムボルでもなく、官能に訴へんとするものでもなく、將た神經を打たんとする手段でもない。是れは薔薇色の死體、生臭き血、亡びし人、生ける人の上で、ケラケラ笑つて居る赤き笑である。其下で狂人は間斷なしに、夢中で書いて居る。——花と歌だ。然し何時迄書いても花と歌は現はれて來ない。人生も其通りだ。人は常に花と歌を綴つて居るが、何時迄綴つても只の白紙で、花と歌は實現して來ない。要するに幻像だ、虚偽だ。人は常に幻像を追ひ、虚偽の影

を捉へんとして居るのだ。
 アンドレエフは其原因を探ねて、遂に自我に到達した。『人の生活』と云ふ作が其れである。彼は人々に臆病なる奴隸的自我の在ることを知つた。幻像も、虚偽も、花も、歌も、苦痛も、恐怖も皆な此の臆病なる自我の所生である。世界も、人類も、天國も、地獄も要するに一心の作用に過ぎない。歴史が人を造るのでなく、人々自から歴史を造つて居るのである。一切萬事人間自身の中に在る。唯だ肉に縛らるゝ靈の奴隸的根性が人を壓迫して居るのである。故にアンドレエフの『饑饉王』は我々に向つて自己に反抗することを頻りに絶叫して居るのである、

四

最後にアンドレエフの作風や描寫の方法に就て少し述べやう。アンドレエフの觀察は何處までも心理學的で、其描寫は徹頭徹尾病理學的である。其中には随分緻密な解剖が行はれて居て、非常に深刻な感じがする。アンドレエフの態度は、譬へ

ば巧みな外科醫の態度である。外科醫が病人の肉體を切開する時には鋭い解剖刀をグイと病體に切り込んで種々隠れた微細な神経や、目に觸れない複雑な細胞の痛みを探ねる。アンドレエフも之と同じ行方で、其人物の内面生活を細かに觀察する爲には矢張此の大手術を行つて居る。例へば前に示した『七死刑物語』の如き、七人の人物の死刑前に於ける心理状態を觀察し、解剖せんが爲に、彼は此の七人の革命黨員を同時に断頭臺の上に擧げて居る。尤も、此の方法はアンドレエフに依りて始められたと云ふ譯ではない。死の恐怖、死の痛苦は既に是迄も幾度か人心の謎を解かんとした多くの心理學者等に依りて試みられた事である。露國文學に於ても、西歐文學に於ても、吾人は既に死の淵に臨める人の心理を辿らんとした多くの計畫の有つた事を知つて居る。例へばドストエフスキイの如きは、吾人に斯かる恐るべき境遇に在る人の心理を示した一人である。雖然、其所に差別がある。ドストエフスキイや其他の人々は實際自

から死の恐怖を経験して、其れを深刻に、物凄く傳へては居るが唯だ其れ丈だ。其れ以上には何等新らしき、隠れたる、未だ知れない別種の恐怖と云ふものは感ぜられない。所が、アンドレエフの作物を讀むと、全く新しい恐怖が感ぜられる。以前認めなかつた深淵が大きな口を開いて居る。其迄全く豫期しなかつた不意の心持が浮んで來る。加之に、印象の力が極めて強く、鋭く、深く、鮮やかであるから、讀みながら氣が變になる。人に依ては全く狂氣にならないとも限らない。
 夫故にアンドレエフを讀むには重病人の肉體を切開する氣で讀まなければならぬ。差當り先づ同情感とか、興奮性とか、刺激性とか云つたやうな感じ易い性能を悉皆無くした上で掛らなければ餘程危険である。作中人物の痛苦、悲哀、恐怖、戦慄と云ふやうな凄味ある心状態を客觀的に觀照しやうとするには、何うしても自分に於て豫め純生理的作用を殺すか、鈍くするか、何つちかしなければ、仕舞には自分か作物に囚はれて了つて、み

すゝ恐怖の犠牲とならなければならぬことにな
 る。アンドレエフを讀むのに大なる克己を要する
 と云ふのは則ち此の謂である。(完)

ルーズベルト氏時代概観

小 倉 和 市

緒 論

去三月の初旬を以てルーズベルト氏は白宮を去れり。爾來合衆國の評論界は舉て氏が合衆國の進歩發達に貢獻せる所の偉大なるを承認し其偉功を賞揚せざるはなし。實に氏が米國行政長官の地位に於ける活躍の歴史は一方に於て氏が有する類例なき人格の發現を示して所謂懦夫をして起たしむる概あると同時に、他方に於ては合衆國の近時政治史の小寫として同國最近の急速なる發展を吾人に會得せしむるに足るものがあるが故に予は米國評論の評論が報ずる所により左に其一斑を紹介せ